

小森の千曲川に架かる石土手に関する研究

小森の千曲川に架かる石土手を後世に継ぐ会

悠久なる流れと、豊かな水の恵みを地域の人々にもたらす、日本を代表する大河「千曲川」を、当地域（長野市篠ノ井小森地籍）において、川幅全面に渉り横断している「石土手」と称される石造構造物が、この川を横断し堰きとめて「滝」の形態を呈している。

「石土手」は、何の目的で・どのような経過を経て・誰が・何時・築造したのか等の、詳細を知る者は地域にはいないが、断片的に古老達から聞かされているに過ぎない。

しかしながら、地域の先人達が現に千曲川に架かる「石土手」大滝を、遺産として今日まで継承してくれた。その恩に報いる為に、「石土手」の築造に至った経過を解き明かし、施設を後世に継ぐために調査・研究するものがあります。

なお、本調査・研究に当っては、（社）北陸建設弘済会のご援助と国土交通省千曲川河川事務所のご理解とご協力を戴いたものであります。

「戌の満水」

「戌の満水」を語らずして「小森の千曲川に架かる石土手」を語ることは出来ない。

寛保2年(1742年)8月27日～30日にかけて、浅間山地を中心に大雨が降り続いた。浅間山地の南西面に降った大雨は、千曲川上流の急流部を一気に駆け下り、川中島平らを席捲し川筋の各地に未曾有の大被害をもたらした。

小森村を含む近隣9カ村の被害状況は、流死者460余名、流家・潰家430余戸に及ぶ甚大な被害であった。

川中島平を暴れ回った、「戌の満水」は越後平野に流れ下り平野部一帯に大きな被害を引き起こした。越後の人々は「信濃水」と呼び現在も恐れられ、語り継がれている。

一方、浅間山地の北東斜面に降った雨は、荒川・利根川流域に流れ下り、現在の群馬県・埼玉県・東京都に甚大な被害をもたらした。この大災害は、近世（江戸徳川時代）以降最大最悪と言われている。この寛保2年は暦法の「戌」年であることから「戌の満水」と後世の人々は言い語り継がれている。

千曲川の瀬直しと原八郎五郎

松代藩十万石の本城・松代城は千曲川の流れを天然の要害として築城された、平城で城のすぐ脇が千曲川の本流であった。ひとたび、千曲川に洪水が起きると、城と城下町は水難に見舞われ松代藩の積年の悩みであった。「戌の満水」が発生した寛保2年（1742年）の藩主は5代信安（1736～1752年）の時代である。

5代信安公の小姓役から側納戸役となった原八郎五郎は、その才能が認められ「戌の満水」発生時には家老職に登り詰める。

家老原八郎五郎は、寛保2年の大洪水を契機として、松代城及び城下町を水難から守るため、蛇行する千曲川の瀬直しという壮大な構想を、藩主5代信安公に進言する。信安公はこの進言を聞き入れ、瀬直し普請に着手したと松代町史に記されている。

しかしながら、この計画は壮大で、現代で言う一大プロジェクトで有りながら、基本的な計画及び関係する絵図及び古文書などの存在は未だ確認されていない。

調査史料—A群

史料—1 中澤村文書

延享4年(1747年) 御普請所御堀川間数人別書上帖(篠ノ井公民館東福寺公民館所蔵)

瀬直し普請は、本石土手から下流部の松代城の直近から着手されたと考えられる。この文書は、「戌の満水」から5年後の延享4年(1747年)に作成された、瀬直しのため新たな河川となる用地(耕作地)の、面積、石高を所有者毎に記載した文書である。但し、この時代に掘削された河道判然としない。又説明は困難であろう。(参考文献 長野市立篠ノ井公民館東福寺分館刊 千曲川瀬直しに見る村人の暮らし)

史料—2 松代真田家文書(国立史料館 所蔵)

天明元丑年(1781年)6月 小森村国役御普請御仕様帖写

(元本写 末尾添付)

この古文書は、「小森の千曲川に架かる石土手」に関する最も重要なものであり、石土手の根幹をなす文書と思考される。その内容は、現代の工事設計書で有り、極めて簡略な内容であり、その詳細は図りしれないものがある。次に末尾の2行の文言は次の通りである。

「如斯印形効明紙仕上絵図面相済渡置候以上」

「かくのごとく、いんがたをくわえ、べっし、えずめんを、しあげ、あい、すませ、わたしおきそうろう、いじょう」とある。

ところが、誠に残念至極であるが、この古文書に添付されていであろう絵図面が発見されていない。再度国立史料館にその所在の確認を依頼したが、現段階に於いては発見されていない。

本古文書は、記載事項は簡潔で、内容は難解であり容易には理解出来ない。

特に、千曲川通り、村上、村西の文言は普請の場所を示しているが、添付絵図面が見あたらないため、現在の場所を特定することは極めて困難である。

史料—3

嘉永元年(1848年)八月 小森村東福寺村組合

村々千曲川川除御普請出来型御書上目録

史料の内容は、嘉永元年八月に普請が竣工し、工事の内容が詳細に記録されている。

文面によると、堀川間数、堀川に抱えこみ等の新河道の掘削に関する文言が見られる。

新河道(堀川)の掘削とともに千曲川を完全に横断している「石土手」は、新河道への流水を導くための導流堤と思考され、現在も地域住民が親しみを込めて呼ぶ「石土手」は嘉永元年に構築されたことになる。

この文書の内容は、普請に要した諸材料の調達に始まり、普請に動員された人足数など詳細に記されている。特に「人足数」は4,900余名で有り、「岩割り出船下積み入れ人足1,830人、但し壱坪50人の記載がある。

史料—5

嘉永5年(1852年) 千曲川絵図【千曲川縦ねずみ宿村 西寺尾村迄 絵図】

「浦野家文書」長野市立博物館寄託

嘉永5年(1,852年)に松代藩道橋奉行所の作成で、第八代藩主幸貫(1,823~1,852年)時代の末期に大作である。

この絵図には、松代藩領の南端である、ねずみ宿村から松代城に近い西寺尾村までの長きに亘り、絵巻物として、治水の普請所、瀬直し、用水堰、船渡等詳細に描かれている。

凡例として、「古御普請」は寛保年代から明和(1,740~1,765年)

「未年御普請」は弘化(1,847年)

「申年より御手普請」は嘉永(1,848年)以降の記載がある。

以上は、寛保2年戌年の大水害(戌の満水)、宝暦7年(1,757年)・明和2年(1,765年)・弘化4年(1,847年)の善光寺地震による大水害等々大水害が河筋の各村々を襲っている様子が窺える。従ってこの絵図は往事の御普請の様を調査したものと見られる。松代藩は、これらの災害復旧の費用として、江戸幕府より各々壺万両を拝借金名目で借財している。

調査資料一B群

東福寺村文書16件(長野市立篠ノ井公民館東福寺分館所蔵 長野市立博物館寄託)

小森村は明治22年に東福寺村に吸収合併されたことにより、小森村に関する古文書類は何時しか散逸したものと恐れ、関係する文書は以下の16件保存されている。

文書番号	年代・月	件名	村名等
1.	嘉永元年4月	両村組合御普請御仕立帖 (別添東福寺村住居耕地囲い、 千曲川深水破れ御仕継御普請同積)	東福寺村、小森村 東福寺村役本
2.	嘉永元年4月	両村御堀川人足入料物出方元帖	東福寺村扣
3.	嘉永元年7月	小森東福寺両村組合御普請笈岩乗込野帖	
4.	嘉永元年申10月	両村組合御堀川御普請御仕立帖	小森村、東福寺村
5.	嘉永3年10月	両村御普請日記帳	東福寺村
6.	嘉永3年2月	小森村両村組合御普請御内積帖写	藩役人
7.	嘉永3年2月	小森村両村組合堀川日記	東福寺村世話役
8.	嘉永3年2月	川除御普請御木材伐出木数改帖	東福寺村役本
9.	嘉永3年2月	両村御普請材工請取帖	小森村、東福寺村
10.	嘉永3年2月	両村組合御普請御木材三カ村より 請取仕訳帖	東福寺村世話役
11.	嘉永4年2月	出精御人足日々書留帖	東福寺両村世話役
12.	嘉永4年3月	村々寄御人足日々書留帖	東福寺村、小森村世話人
13.	嘉永4年5月	両村組合御普請日記帖	藩役人 右村々三役人
14.	嘉永4年11月	小森東福寺両村組合千曲川御 ^レ 切 御普請水被御仕継御普請御積	小森村、東福寺村扣
15.	嘉永4年11月	小森東福寺両村組合千曲川除普請御積	小森村、東福寺村
16.	嘉永5年4月	上組前沖 小森東福寺両村組合千曲川 ^レ 切 下続き切り所 ^レ 切御普請御積	藩役人、小森村三役

文書番号—1

嘉永元年4月 両村組合御普請御仕立帖 東福寺村、小森村

本文書の別文書の、「東福寺村住居耕地囲い千曲川深水破れ御仕継御普請同積」が合冊されている。

本文の、概要は、長さ90間、小森村前分水等のほか、諸材料、人足数4,888人うち2,205人寄人足残として2,783人などが記されている。

この文書は、石土手と関連する重要な文書と思われる。次ぎに、この文書に別冊であるが次の文書が綴り込まれている。

「東福寺村住居耕地囲い千曲川深水破れ御仕継御普請同積」のなかにある「千曲川深水破れ」の文言の意味するところは何であろうか。本文の作成月は4月であり、太陽暦では6月にあたる。

このことは、大出水で築堤されていた「石土手」が一部被災してことを意味している。

文書番号—3

嘉永元申7月 小森東福寺両村組合御普請笈岩乗込野帖 東福寺村扣

普請に必要な岩石等は、千曲市の土口地籍より船を使い運搬された時の記録であり、普請現地には笈を据付本格的化したものであろう。

文書番号—4

嘉永元年申10月 両村組合御堀川御普請御仕立帖 小森村、東福寺村

この文書から、10月に計画された普請は3カ所である。

- * 1カ所目は、堀川と分水の境目に築造された川除で、分水の越水を防ぐため2間四方笈15挺多くの笈を計画している。
- * 2カ所目は、堀川に関連する場所で南淵は、長さ100間、横平均5間、高さ5尺5寸、北淵は長さ35間、横平均5間、高さ2尺とある。
- * 3カ所目は、堀川分水の掘り割りで、長さ6間とある。

文書番号—14

嘉永4年11月 小森東福寺両村組合千曲川御 \times 切
御普請水被御仕継御普請御積 小森村、東福寺村扣

標記に有るとおり、水破れ箇所での普請箇所で大破堤が有った物であろう。

文書番号—16

嘉永5年4月 上組前沖 小森東福寺両村組合千曲川 \times 切
下続き切り所 \times 切御普請御積 藩役人、小森村三役

上組前沖の岸囲いが洪水で破損したため、大量の資材が必要とされた際の見積書である。

普請に必要な、木材・粗朶を松代藩倉科御林から伐り出す許可を松代藩役人から出されている。

まとめ

小森村・東福寺村関係の千曲川普請箇所は、嘉永5年の松代藩絵図に記載されており、東福寺文書の絵図とも符合し内容が確認出来る。史料については、天明元年のほかは嘉永年間が大部分である。

これらの史料からは、「小森の石土手」そのものは判明しない。しかしながら、堀川が嘉永以前に掘削されており、堀川と両村組合メ切普請が、度々の洪水で被害を受け、御普請が行われたことが明らかとなった。国役御普請は、天明年間だけで、嘉永の御普請は松代藩の御手普請である。

普請の内容の一つ目として、笈・杵・粗朶籠・杭柵を主とし、石積みや笈牛など川除を修築している。

二つ目は、堀川あるいはそれに係わる河岸の堀り揚げである。何れにしても、千曲川は堀川を流れているものの、洪水だけでなく普段の流れの堀川以前の低い旧河道へ営力が働いているものと推察出来る。そこで前述の普請が必要となる。この修築は、大量の川原石に加え岩石（山石）が使用されたことは、史料から明白である。

現存する石土手がなぜ、現流路を横切る形で存在するか？である。明治26年千曲川測量図（長野県歴史館所蔵）を見れば明白である。同測量図によれば、「石土手」は河道の下方に向かっている。

江戸時代の「高島」「干アカリシマ」に沿う形である。現千曲川河道は、明治以降再び河道を北寄りに向けたものと考えられないだろうか。仮にこの推論が成り立つとすれば、嘉永以前から石積みに加えて、嘉永年間の修築による岩石が現存していると推論が可能である。

以上は、古文書を解読した所見を述べておりますが、（社）北陸建設弘済会のご援助の下、国土交通省千曲川河川事務所のご理解とご協力を賜り、「石土手」の現地において、**史料—2松代真田家文書（国立史料館 所蔵）** **天明之丑年（1781年）6月 小森村国役御普請御仕様帖写**の記述の「村前40間」「同所下65間」「村西34間」を参考にして、左岸高水敷地（国有地・耕作占用地）を、平成18年11月14～22日の間、発掘調査をすることが出来ました。

発掘調査第1目に、地表面下約3メートルから、構造物の一部が姿を見せました。石積みで法長は約2間、長手方向は現段階では、確認できていない。更なる延長方向又縦（深さ）方向の発掘調査を実施したいものでありますが、時間的・経済的な問題があり、当会としては現時点のみの調査とした。

幸いなことにその後、河川管理者の国土交通省千曲川河川事務所のご理解を賜りまして、現状を埋め戻すことなく、ご当局において引き続きご調査をして頂くこととなっております。

遺構「石土手」につきましては、当会は元より全地域住民が、その全容の解析に加え遺構として未来永劫に「継ぎ」・「保存」することが、最大の目的であります。